慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	インド, アルナーチャル・プラデーシュのモンパに見る民族表象と伝統の変化の動態
Sub Title	
Author	脇田, 道子(Wakita, Michiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.166- 168
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成25年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000078-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インド，アルナーチャル・プラデーシュのモンパに見る民族表象と伝統の変化の動態

脇　田　道　子

はじめに

2013年度博士課程学生研究支援プログラムの助成を受け，現地にて補足調査を行い博士論文執筆に取り組むことができたことにまず感謝したい。本報告では，博士論文を構成する七つの章のうち，補足調査に基づき新たに書き下ろした二つの章についてその概要を述べる。

研究の目的

本研究の目的は，インド北東部のアルナーチャル・プラデーシュ州[1]（以下，アルナーチャルと略す）の中国との国境地帯に住むモンパの集団形成や文化の諸相を多様な視点で提示し，動態的な過程を考察することである。

モンパ（Monpas）とはかつてはチベット中央部から見てヒマラヤ南麓一帯のモン〈mon〉の地，モンユルに住む人びとの総称で，特定の集団を指す呼称ではなかった。チベット語の「モン」の語源は，中国語で南方の異民族を意味する「蠻」（mán）に由来し，「南あるいは西の山岳地帯に住むインド人でもチベット人でもない蛮族」を意味していた［Aris 1980: xvi］この総称であるモンパに含まれていたと想定される人びとは，インド，ブータン，そして中国（西蔵自治区）の3ヶ国に見られる。だが，本論文が対象とするのは，独立後のインド憲法342条に基づき，教育，雇用，議席などの優遇政策を受ける行政的な範疇である指定トライブ（Scheduled Tribe）として「モンパMonpa」となった人びとである。

モンパが住むのは，州の西端のタワン県，西カメン県の二県であるが，チベットとの国境近くにあるタワンとアッサム平原に連なる西カメンでは自然環境は大きく異なっている。5万人に満たない人口であるが，血縁，言語，居住環境，信仰などさまざまな違いのある人びとがインドの「指定トライブ」となっている。だが，モンパがその範疇化に異を唱えているわけではない。逆に，同じ民族衣装をまとい，現在は，チベット語教育やモン自治地域を求める運動さえ進めている。論文全体は，「民族衣装」，「伝統文化」，「言語と自治要求」，「ツーリズム」という異なるテーマから成り立っているが，さまざまな視点からモンパと範疇化された人びとの過去，現在，未来を考察してゆく。

伝統文化と現代―タワン県を中心として

ここではタワンのモンパをとりまく三つの伝統文化を，定着，衰退，継続の三つの側面から考察する。

一つは，タワン僧院で毎年チベット暦の11月に開かれる，トルギャ祭と3年に一度のドンギュル祭である。悪霊払いの儀礼が主たるものだが，3日間にわたり，早朝から夕方まで，仮面舞踊が繰り広げられる。ここでは，それによって，因果応報，悪霊調伏，輪廻転生などの仏教教義が人びとに可視化される。そして高僧による加持，弥勒菩薩の巡幸による祝福を受け，さまざまな障害からの守りを得て，人びとは心安らかに家路につく。民衆教化の色合いの強いもので，チベットとの関係が断絶しても仏教の

伝統は完全にこの地に根づいていることがわかる。トルギャ祭，ドンギュル祭にはブータン東部のサクテン，メラからも多くの人が雪の山道を歩いてやってくる。ブータンは，主としてドゥク・カギュ派を信奉する仏教王国であるが，サクテンとメラの人びとはダライ・ラマ法王を座主とするゲルク派を信奉している。ブータンでは，少数派である彼らが，この地域最大のゲルク派寺院であるタワン僧院での法要に参加することは，彼らにとって，大きな喜びであることがインタビューからわかる。また，多くの人びとが集まる祭りの場では，国境をまたいで，さまざまなモノとヒトとの交流が見られる。

二つ目は，ヤク・チャム（ヤクの仮面舞踊）で，モンパには重要な動物であるヤクがどのようにこの世に現れ，モンパの地で繁殖していったかを口承伝説を基に無言劇に仕立てた民俗儀礼である。正月に一日かけて村の広場で楽しむもので，ここでは，ギャンカル村のものを中心にさまざまな由来譚を紹介する。同様のものがブータンのメラでも見られ，そちらはテクストを媒介として伝承されているが，モンパは文字をもたないため，次世代への伝承が危ぶまれている。以前は，モンパの伝統芸能として，州外での公演などの機会もあったが，その座を，チベット人の若者のグループがコンパクトにまとめた舞台上のショー的なパフォーマンスに奪われている。人びとが伝統を伝統として意識していない，「前近代」にいて，状況をモニタリングするという意味での再帰性がまだ十分に発生しておらず，伝統文化を意識化できていない。そのような現状では，「主張する文化」となることはできず，客体化，資源化するには無理がある。かつてタワンにあったポン教起源の儀礼が，最後の伝承者の死と共に衰退したのと同じ道をたどる可能性もある。

三つ目は，モクトウ村のジンチョウゲ科の植物の靭皮を材料とした紙漉きである。原始的な製法ではあるが，機械に頼らず，すべての工程を一人でこなせるという利点がある。かつて，政府が機械を導入したことがあるが，電気供給が不安定なタワンでは役にたたず，それらの機械は放置されているという現状がある。結局，従来のやり方で継続され，紙漉き小屋も少しずつ増えている。それを支えているのは，グランマと呼ばれる，互助システムである。また，この手漉き紙の最大の顧客は，ブータンの寺である。マニ車の中に入れる経文をこの紙の上に刷るためにモクトウの紙を大量に購入するという。その用途が仏教と結びついているため，継続性，反復性が期待できる。

言語とアイデンティティ―ボーティ語教育とモン自治要求運動を事例として

本章では，現在進行中のモンパの僧侶，政治家，知識人によるボーティ語（チベット語）教育と自治地域要求運動について4つのポイントに沿って考察する。

その第一のポイントは，要求している言語がモンパの母語ではないチベット語であり，それをボーティ語と呼んでいること，第二は，モン自治地域を要求しているが，アルナーチャルが自治地域を主張できる憲法の第6付則の適用除外地域であること，第三は，この運動に対するモンパ以外の人びとや運動の外にいる人の反応，第四は，ボーティ語要求について書かれた先行研究の検討である。

モンパは，共通の言語も文字も持たず，仏教徒であるという共通のアイデンティティを強調するためにチベット語教育を要求しているが，それは，州内にいるチベット難民に対する排斥運動やラダックなどインド内の他の地域と連携を組んでのボーティ語の公用語化運動を意識したものとなっている。そのため，チベット語という直接的な言い方を避けていると推察される。モンパの自治要求運動の動きは，2003年からの経過報告で追うことができるが，2004年に州議会を通過し，2008年に中央政府に送られたが，結局，回答は得られず，州内では，モンパの自治要求に対する学生組織による反対デモが行われた。

その後，2011年4月のモンパ出身の州主席大臣のヘリコプターによる事故死とその後継者選びを巡っての州内の混乱があり，自治地域要求は，立ち消えになったかに見えたが，2013年になってまた運動が再開されている。第6付則の適用外でありながら自治を獲得したアッサムのボド領域県の例があり，まったく不可能ではないが，自治要求が州内の他の地域の人びとからは，州を分断するものだとの反発の声がある。アルナーチャルは北東諸州のなかでは平和な州だとされてきたが，近年，トライブ間の対立が表面化している。そうした状況の中での要求であるため，モンパの人びとの間でも戸惑いがある。

先行研究の中で，ボーティ語要求を，ヒマラヤ地域との「想像の共同体」意識によるもので，ボーティ語で教えようとしているものが，モンパの文化ではなく，チベットのものだという批判がある［Gohain 2012］。モンパの言語要求が「想像の共同体」意識によるものであることは，それが母語でないことからも同意できるが，この批判の中では，モンパが，チベット文化圏の中にあり，モンユルもチベット文化の一端を担ってきたことが無視されている。

言語や自治という国家を相手にした要求の場合，当然,「われわれ意識」をもったトライブ集団なり，民族集団という単位が必要になる。この二つの運動は，行政上の名づけである指定トライブの「モンパ」が共通のアイデンティティをもった「モンパという民族」となることを目指し，国家や州内における自らの存在の再定位をはかる過程とみなせるのではないだろうか。

注

1　アルナーチャル・プラデーシュ州はかつて北東辺境管区（North East Frontier Agency: NEFA）と呼ばれていたが1987年に州に昇格した。1914年にシムラー協定でイギリス，チベット政府間で合意された中国とインドとの国境，マクマホン・ラインによってインドが実効支配しているが，中国はそれを承認せず，1962年には中印国境紛争が起きた。現在も中国が州のほぼ全域の領有を主張している。係争地であるため，州への入域には，特別許可が必要である。

参考文献

Anderson, Benedict. 1983 *Imagined Communities*: *Reflection on the Origins and Spread of Nationalism*. London: Verso.（アンダーソン『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』白石隆・さや訳，書籍工房早山．2007）

Aris, Michael. 1980 *Bhutan*: *The Early History of a Himalayan Kingdom*. New Delhi: Vikas Publishing House.

Gohain, Swargajyoti. 2012 Mobilising language, imagining region: Use of Bhoti in West Arunachal Pradesh. *Contributions to Indian Sociology*. (46): 337–363.

地域社会における宗教者をめぐるネットワーク
―福岡県ウツシ霊場篠栗の事例からみて―

ラモット・シャールロット

福岡県の東北部に位置する篠栗新四国霊場は「日本三大新四国霊場」の一つで，本四国のウツシ霊場である[1]。篠栗町内に八十八カ所の札所があり，年間に篠栗を訪れる人々の人数は20万人を超える。全国から多くの参拝者や遍路[2]が集まり，南蔵院を総本寺とする「地方霊場」として栄えている[3]。天保6年（1835）に尼僧の慈忍が創設し，藤木藤助が完成させたと伝わる[4]。元来は本四国へ行けない人のた